土浦市中村西根地内

中　新　台　遺　跡

発掘調査報告書

1996. 3

土浦市教育委員会

土浦市遺跡調査会

土浦市中村西根地内

中　新　台　遺　跡

発掘調査報告書

１９９６．３

土浦市教育委員会

土浦市遺跡調査会

序

土浦市は、北西に名峰筑波を、東には我が国第二の湖霞ヶ浦を望み、市内のほぼ中央には謡曲にも唄われた桜川が流れる山紫水明の地であります。現在、県南地域の中核都市として発展いたしておりますが、その前身は近世土浦藩の城下町でありました。更に遡ってみますと、中世には多くの城館や寺院が創建され、古墳時代や弥生時代の遺跡も残されております。また、昨年復元整備されました「上高津貝塚ふるさと歴史の広場」に見られますように、市内には縄文時代の遺跡も多数発見されております。これらの豊富な埋蔵文化財に見られますように、当地は古くから人間にとって住みやすい土地であったと思われます。

これら本市の歴史を語る埋蔵文化財は、先人の業績を顧み、後世の人々にその歴史と人間の係わりを伝え、理解してもらうために、大切に保護して参らねばならぬものであります。その土地と人間の太古からの結びつきを知り、その知恵と知識を保存・活用してこそ未来の人々への財産を築くことができるのであります。

本報告書は、去る平成６年８月に行なわれました学校法人常総学院の運動場造成工事に伴う、発掘調査を記したものであります。当中新台遺跡からは、古墳時代の住居跡が二軒発見され、土器や土製の玉などの貴重な遺物が出土いたしました。この報告書が今後、本市の歴史を語る一助として広く活用されることを希望いたします。

最後に、当遺跡の発掘及び整理調査に際しましては、学校法人常総学院をはじめ、関係各位の方々の多大なる御厚意と御協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

平成　８年　３月

土浦市教育委員会

教育長　青木利次

例言

1、本書は、平成６年８月５日から８月１８日までのあいだ実施された、茨城県土浦市大字中村西根９３５番地外にある中新台遺跡の発掘調査報告書である。

2、当発掘調査は学校法人常総学院の運動場造成工事に伴い、記録保存を目的として土浦市遺跡調査会が実施した。

3、発掘調査は、関口満（土浦市教育委員会文化課文化財係）・橋場君男が担当し、終了後整理作業を行なった。

4、本書の編集・執筆は橋場が行なった。

5、当遺跡出土の遺物や記録類に関しては、上高津貝塚ふるさと歴史の広場が保管している。

凡例

1、挿図図版の縮尺は、指示されたものを除いて原則として遺構を１／６０、遺物を１／３または１／１で示した。

2、挿図図版中の数値は、標高を示している。

3、遺構の推定線には点線を用いた。

4、遺物実測図中における中央の一点鎖線は回転実測を行ったことを示す。

5、遺物実測図上の矢印は、ナデが施された方向を表す。

6、遺構図中のスクリーントーン貼り付け部分（　　）は、炭化物または炭化材の付着した範囲を示す。

7、遺物図中のスクリーントーン貼り付け部分（　　）は、黒色処理の範囲を示す。

8、出土遺物の色調観察には『新版標準土色帖』（編　小山正忠・竹原秀雄　1990）を使用し、表現方法も同書に従っている。

目次

序
例言
凡例
目次
挿図目次
写真図版目次
土浦市遺跡調査会組織
中新台遺跡調査組織

第一章　調査の経緯……P1
第二章　遺跡の立地と環境
　第一節　地理的環境……P1
　第二節　歴史的環境……P5
第三章　遺構及び遺物
　第一節　1号住居址……P5
　第二節　2号住居址……P12
　第三節　遺構外出土遺物・寄贈資料……P12
第四章　まとめ……P14

挿図目次

Fig 1　遺跡周辺地形図……P2
Fig 2　周辺の遺跡……P3
Fig 3　遺構全体図……P4
Fig 4　1号住居址遺物出土状況……P6
Fig 5　1号住居址完掘状況……P7
Fig 6　1号住居址カマド完掘状況……P8
Fig 7　1号住居址内出土遺物……P9
Fig 8　1号住居址カマド内出土遺物……P10
Fig 9　1号住居址一括出土遺物……P11
Fig10　2号住居址貯蔵穴完掘状況……P12
Fig11　2号住居址貯蔵穴内出土遺物……P12
Fig12　遺構外出土遺物……P12
Fig13　寄贈資料……P13

写真図版目次

PLATE 1……写真1 発掘調査前風景、写真2 1号住居址完掘状況(南より)
PLATE 2……写真3 1号住居址覆土堆積状況、写真4 1号住居址覆土堆積状況、写真5 1号住居址遺物出土状況
PLATE 3……写真6 1号住居址遺物出土状況、写真7 1号住居址カマド完掘状況、写真8 2号住居址貯蔵穴完掘状況
PLATE 4……1号住居址出土遺物(1～10)
PLATE 5……1号住居址カマド内出土遺物(11～16)、1号住居址一括出土遺物(17～19)
PLATE 6……1号住居址一括出土遺物(20)、2号住居址出土遺物(21)一括出土遺物(22～25)寄贈資料(26・28)

土浦市遺跡調査会組織
（平成６年度～平成７年度）

会　長	須田直之	土浦市文化財保護審議会委員長
副会長	青木利次	土浦市教育委員会教育長
理　事	大塚　博	土浦市文化財保護審議会委員
	廣田宣治	土浦市参事兼企画課長
	野口幹雄	土浦市区画整理課長（～平成６年３月）
	内海崎保生	〃　（平成７年４月～）
	雨貝　宏	土浦市参事兼建築指導課長
	山田和也	土浦市都市計画課長（～平成６年３月）
	野口幹雄	〃　（平成７年４月～）
	内海崎保生	土浦市耕地課長（～平成６年３月）
	金塚文雄	〃　（平成７年４月～）
	大塚重治	土浦市土木課長
監　事	矢口　寛	土浦市教育委員会教育次長
	飯田章二	土浦市監査事務局長
幹事長	宮本　昭	土浦市教育委員会文化課長
幹　事	矢口俊則	土浦市教育委員会文化課長補佐（平成７年４月～）
	小貫俊男	土浦市教育委員会主査兼文化財係長
	塩谷　修	土浦市教育委員会文化課主幹兼土浦市立博物館学芸員
	石川　功	土浦市教育委員会文化課主幹
	黒澤春彦	土浦市教育委員会文化課主事
	中澤達也	土浦市教育委員会文化課主事
	関口　満	土浦市教育委員会文化課主事
	橋場君男	土浦市教育委員会文化課臨時職員（平成６年７月～平成７年３月）
		〃　主事（平成７年４月～）
	宮本礼子	土浦市教育委員会文化課主事（平成７年４月～）

中新台遺跡調査組織

（1）中新台遺跡発掘調査

主任調査員　橋場君男

調査員　　関口　満

（2）中新台遺跡整理調査

主任調査員　橋場君男

調査補助員　加藤寛生

（3）調査事務局

土浦市教育委員会文化課

（4）発掘調査および整理調査参加者一覧（敬称略、５０音順）

石山春美、小野豊、大久保由紀子、川田光子、菊田浩一、小松崎広子、谷口陽子、中野耕太郎、長嶺道子、中村節子、浜田久美子、槇田整子、細田悦子、細田祐子、松川さち子、渡辺恒子

（5）助言者・協力者一覧（敬称略、５０音順）

石橋充、茨城県教育委員会、茨城県県南教育事務所、学校法人常総学院、小玉秀成、三友測量設計株式会社、仕黒一郎、土浦市文化財保護審議会、宮本喜男、本橋弘美、森田忠治、吉田匠、渡辺丈彦

発掘及び整理調査にあたりましては、上記の方々に御指導・御協力を戴きました。記して感謝申し上げる次第です。

第一章　調査の経緯

平成6年6月、学校法人常総学院より、土浦市開発行為指導要綱に基づく事前協議の申請が提出された。土浦市教育委員会が現地を踏査したところ、申請地は周知の遺跡である中新台遺跡(県遺跡地図番号5228、市遺跡地図番号A-41)に隣接し、遺跡の延長域が開発予定地に包含される可能性が想定された。そのためトレンチを5本設ける試掘調査を7月14日に実施したところ、竪穴住居址(1号住居址)の存在が確認された。事業者である学校法人常総学院と協議を重ねた結果、本格的な調査を行ない、記録保存措置をとることを決定した。

発掘調査は8月5日から開始し、重機による表土除去を行なった後に遺構の検出に入った。

調査区は、試掘坑内に発見された住居址を東西南北各10m拡張した範囲とし、当概区を地籍図・地形図中におとすことによって、地形上の位置を復原した。8月16日に1号住居址の検出及び記録化は終了し、8月17日に調査区内の他の遺構の調査は完了した。8月18日に器材の撤収を行ない、すべての作業は終了した。

第二章　遺跡の立地と環境

第一節　地理的環境

土浦市は県南地区に包括される人口約13万2千人、面積約92㎢の都市である。県全体の中ではやや南寄りの位置にあり、東を霞ヶ浦に接している。市域は、筑波山地から東南にのびる新治台地、桜川及び古鬼怒川によって形づくられた桜川低地、霞ヶ浦の南西部に接する筑波稲敷台地の三者から成り立っている。

中新台遺跡は、花室川低地の右岸に面した、中位段丘である稲敷台地上に所在する。台地の標高は約24～25mである。地層上は、表土・耕作土下に火山灰と腐植土の混在する黒ボク土があり、続いて厚さ2～3mの関東ローム層、以下灰白色の常総粘土層、浅海性砂層の木下層と続く。

遺跡は、花室川から南に伸びる谷が三つの支谷に分岐するうち、最も北よりの支谷に面した位置に有る。今回の調査区は台地の縁辺部にあたっているが、分布調査や踏査による限り、遺物は台地の中央寄りに密に分布している。そのため、遺構の密度も遺物の分布に比例すると考えるならば、遺跡の中心は台地中央部にあるものと想定される。付言すると、遺跡範囲の南側に隣接して堂場台遺跡(県遺跡地図番号5229、市遺跡地図番号A-42)があるが、両遺跡によって同一台地が覆われることになる。採集された遺物も土師器・須恵器と共通することを考慮すると、中新台遺跡と堂場台遺跡の両者が一連の遺跡群である可能性が指摘できる。

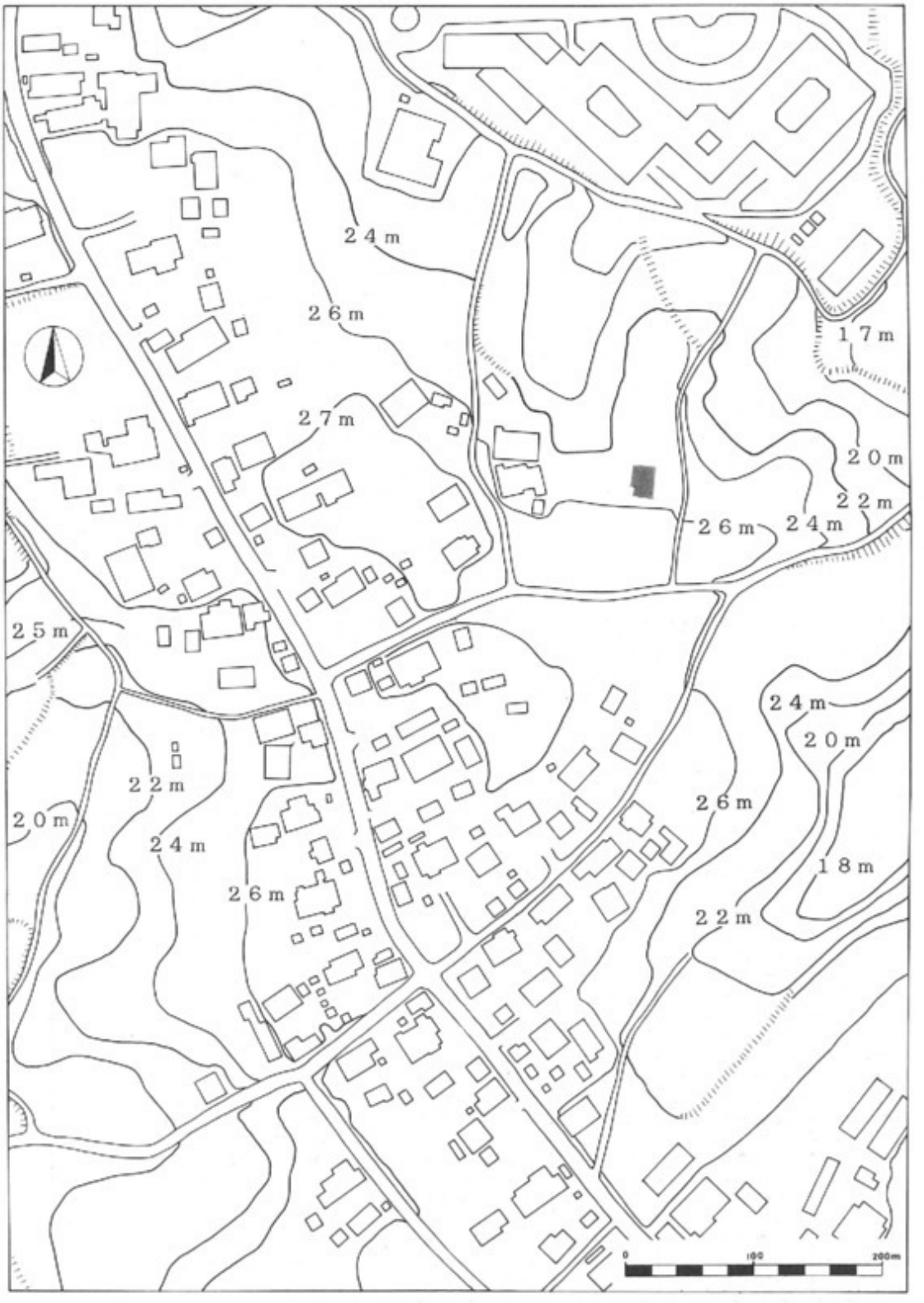
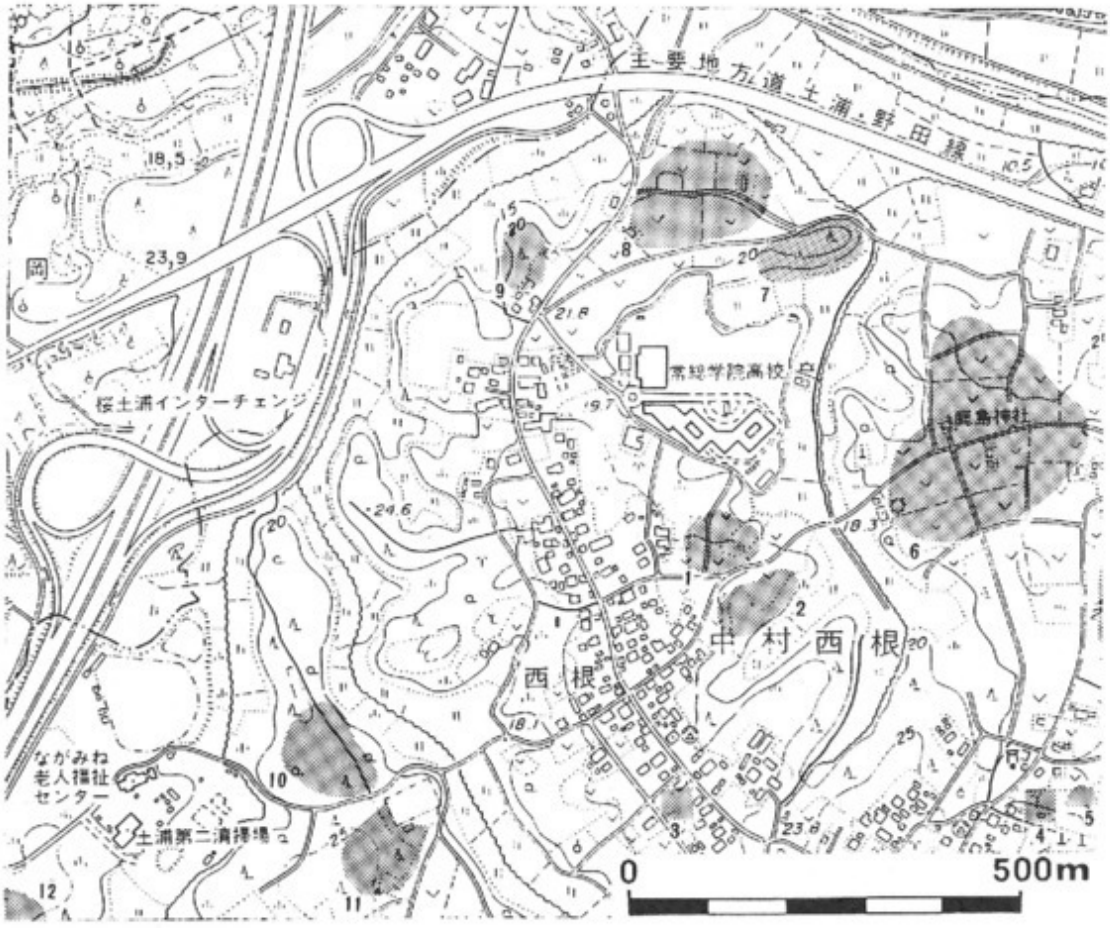


Fig 1 遺跡周辺地形図



番号	遺跡名	種別	所在地	時代
1	中新台遺跡	集落跡	西根町字中新台	古墳(前・後期)、奈良・平安
2	堂場台遺跡	集落跡	西根町字堂場台	古墳、奈良・平安
3	西所在塚	塚	中村西根字西	不明
4	大日古墳	古墳	西根町字白楽	古墳
5	白楽所在塚	塚	西根町字白楽	不明
6	宮脇遺跡	集落跡	西根町字宮脇	古墳、奈良・平安、中世
7	不動堂古墳群	古墳群	西根町字不動堂	古墳
8	後猶遺跡	集落跡	西根町字後猶	縄文、奈良・平安
9	二又遺跡	集落跡	西根町字一区字二又	縄文、古墳、奈良・平安
10	笹崎遺跡	集落跡	中村西根字笹崎	縄文(中期)
11	石橋台遺跡	集落跡	中村西根字石橋台	縄文(中期)
12	長峰遺跡	集落跡	中村西根字長峰	縄文(前期)

Fig 2 周辺の遺跡

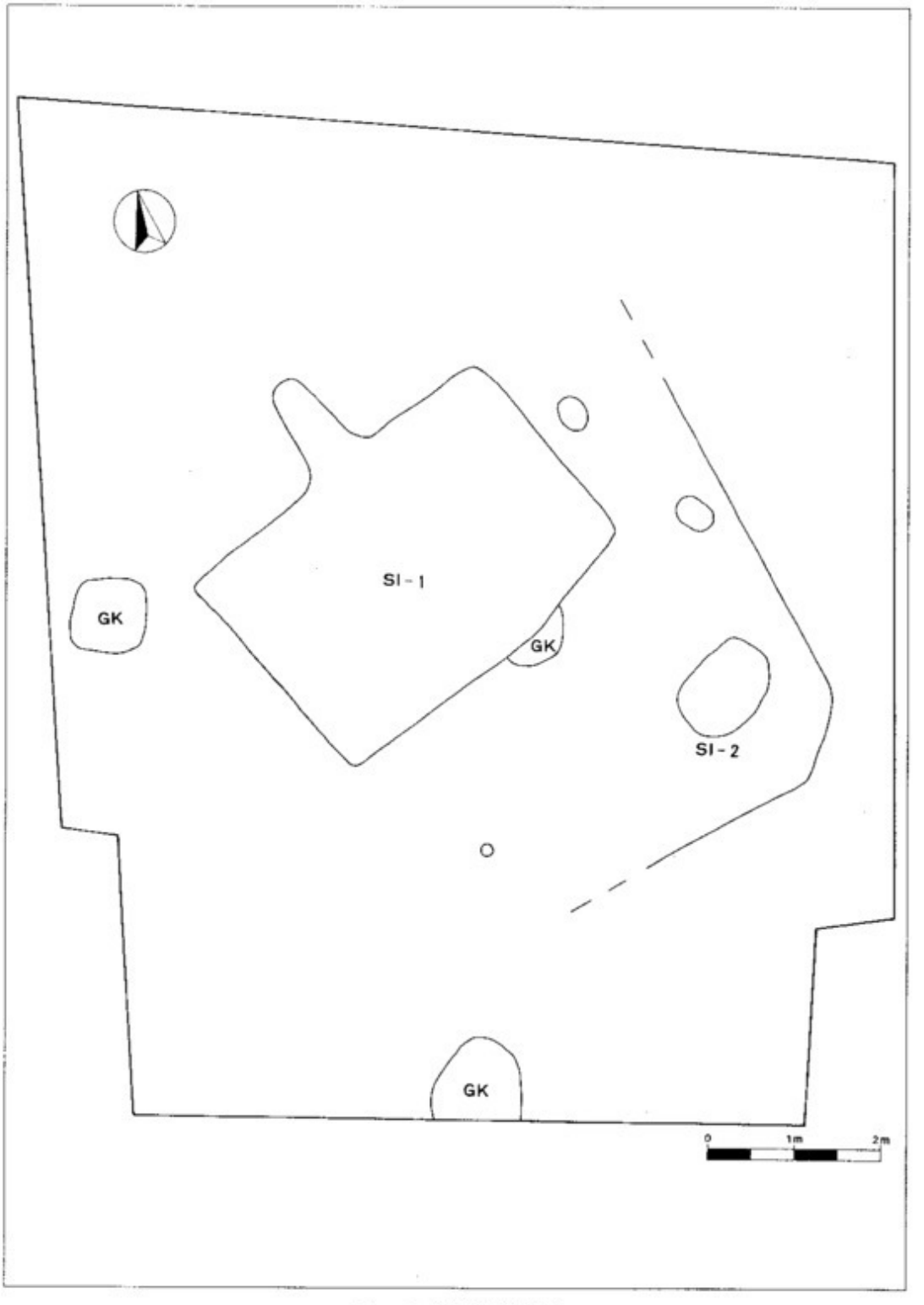


Fig 3 遺構全体図

第二節　歴史的環境

土浦市内における周知の遺跡は、現状で約387箇所である。これは、昭和51(1979)年茨城県教育委員会発行の「茨城県遺跡地図」、昭和55(1980)年より同58(1983)年まで実施された茨城大学人文学部史学教室による分布調査、それ以後に土浦市教育委員会によって所在が確認されたものの総計である。これらの遺跡の立地の全体的な傾向は、洪積台地上に多く、沖積低地は微高地上を除き稀少である。

花室川低地に接する筑波·稲敷台地上は、過去幾度も発掘調査が行われている。主要なものでは、土浦市教育委員会·国士館大学考古学研究室によって1972年に烏山遺跡(土浦市教育委員会 1988)が、財団法人茨城県教育財団によって1988年に寺家ノ後A遺跡外5遺跡(茨城県教育財団 1990)と南丘遺跡外5遺跡(茨城県教育財団 1991)が調査されている。特に烏山遺跡からは、古墳時代前期後半に位置付けられる玉作り工房跡が発見されている。

中新台遺跡周辺には、周知の遺跡が少なからず分布する(Fig2)。南方の道路を隔てては堂場台遺跡があり、北東約400mには二又遺跡がある。これらの遺跡の立地は、河川に対する遠近はあるものの、基本的に台地の中でも縁辺部にあるものが多い。時期的には縄文時代中期と古墳時代、奈良·平安時代が多く、それらが複合する遺跡もある。

第三章　遺構と遺物

第一節　1号住居址

1号住居址は、試掘調査においてその所在が確認された古墳時代後期の竪穴住居址である。

住居の規模は、東西方向が最大長で410cm、南北方向が295cmの長方形である(カマド部分は除く)。住居の壁面は概ね垂直に落ち、床面はローム土を固めてできた貼り床を呈する(Fig5)。

住居には、根菜類栽培時に生じた溝状の攪乱(トレンチャー)が縦横に入るほか、南壁沿いにはぶどう栽培に際して掘られたといわれる穴が掘られていた。覆土の堆積状況は、西・南壁寄りに黄色味のやや強い土がみられる以外は、ほとんど水平に堆積する。また、住居床面よりも約5～6cm上位には10cm大の炭化物が斑状に検出された(Fig 4)。

1号住居に伴う付属施設には、カマドと入口施設に伴うと思われる穴がある。カマドは裾の部分を比較的良好に残している。裾部は、銀白色の針状物質を多く含んで堅緻であり、スサを混えて構築したものと思われる。また、東側の裾の外面には、20cm大の炭化物の付着が認められた。裾部の遺存長は最大で約47cm、幅約11cmである。カマドの焚き口部は南からゆるやかに楕円形状に落ちこみをみせ、煙道部へ立ち上がる。煙道先端部の底面には10cm大の穴がみられた(Fig6)。

また南壁沿いには、入口施設に伴うと想定される穴が1基発見された。他にも、壁溝の可能性

がある溝の一部や、壁に沿って穿かれた穴がみられたが、住居の利用に伴うものという確証は無い。柱穴と考えられる穴は発見されなかった。

1号住居址の出土遺物には、石製品、土師器、土製玉類、手づくね土器などがある(Fig7～9)。

1は、用途不明の石製品である。遺存長は16.1cm、幅8.5cmである。材質は雲母片岩である。片面に3ヶ所、反対面に2ヶ所の窪みが残る。

2は、内外面が黒色処理された土師器杯である。復原口径14.4cm、器高3.9cmである。色調は、外面が黒褐色(7.5YR3/1)、胎芯が明赤褐色(2.5YR5/6)を呈する。胎土中には、長石を少量、石英・雲母を微量に含む。焼成は普通である。体部外面は横位のヘラミガキ、内面は放射線状のヘラミガキ、口唇部にはナデを各々施している。

3は手づくね土器である。口径4.7cm、底径3.5cm、器高2.0cmである。色調は橙色(7.5YR6/6)である。胎土中には雲母を微量に混じえる。良土である。焼成は普通である。内外面ともに指頭によるナデ成形の痕跡を顕著に残す。

4は、用途不明の土製品である。色調は褐色(7.5YR4/4)を呈する。長石粉粒を少量含む。焼成

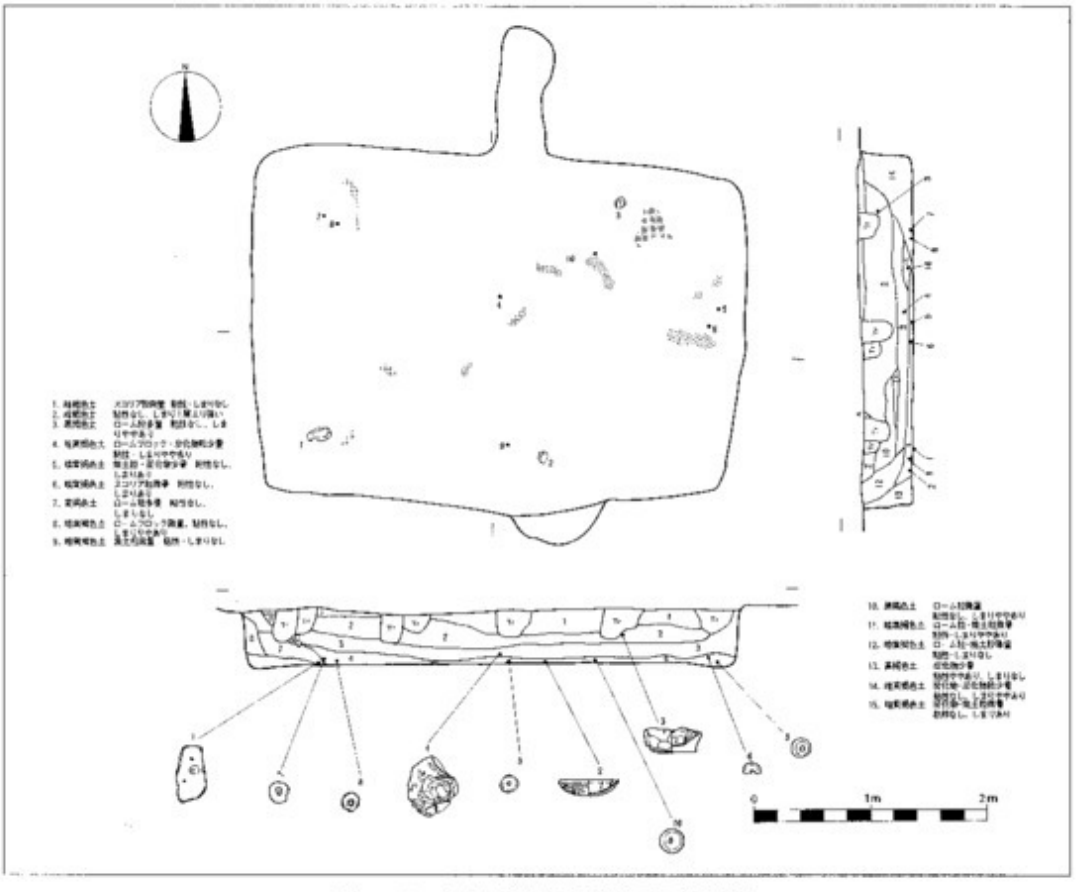


Fig 4　1号住居址遺物出土状況

は普通である。赤色に変色している箇所があり、被熱したことがわかるが、用途は不明である。表面には幾条もの削痕がみられる。

5は、土製小玉である。長さ0.8cm、幅0.8cmである。色調は明褐色(7.5YR5/8)を呈する。長石・雲母を極く微量に含む。焼成は普通である。下端面を少々欠損する。

6は、土製小玉である。長さは0.7cm、幅0.8cmである。色調は褐色(10YR4/4)を呈する。長石を極く微量に含む。焼成は普通である。

7は、玉状土製品である。長さは1.3cm、幅0.9cmである。色調は黒褐色(5YR2/2)を呈する。雲母を極く微量に含む。焼成は不良である。側面にミガキが施されず、玉と断定はできない。

8は、土製小玉である。長さは0.5cm、幅0.7cmである。色調は黒褐色(10YR3/2)を呈する。雲母を極く微量に含む。焼成は普通である。両端面が磨滅している。

9は、土製小玉である。長さは1.0cm、幅0.7cmである。色調は褐色(10YR4/4)を呈する。雲母を極く微量に含む。焼成は普通である。

10は、石製小玉である。長さは1.0cm、幅1.0cmである。色調は緑黒色(10G2/1)を呈する。

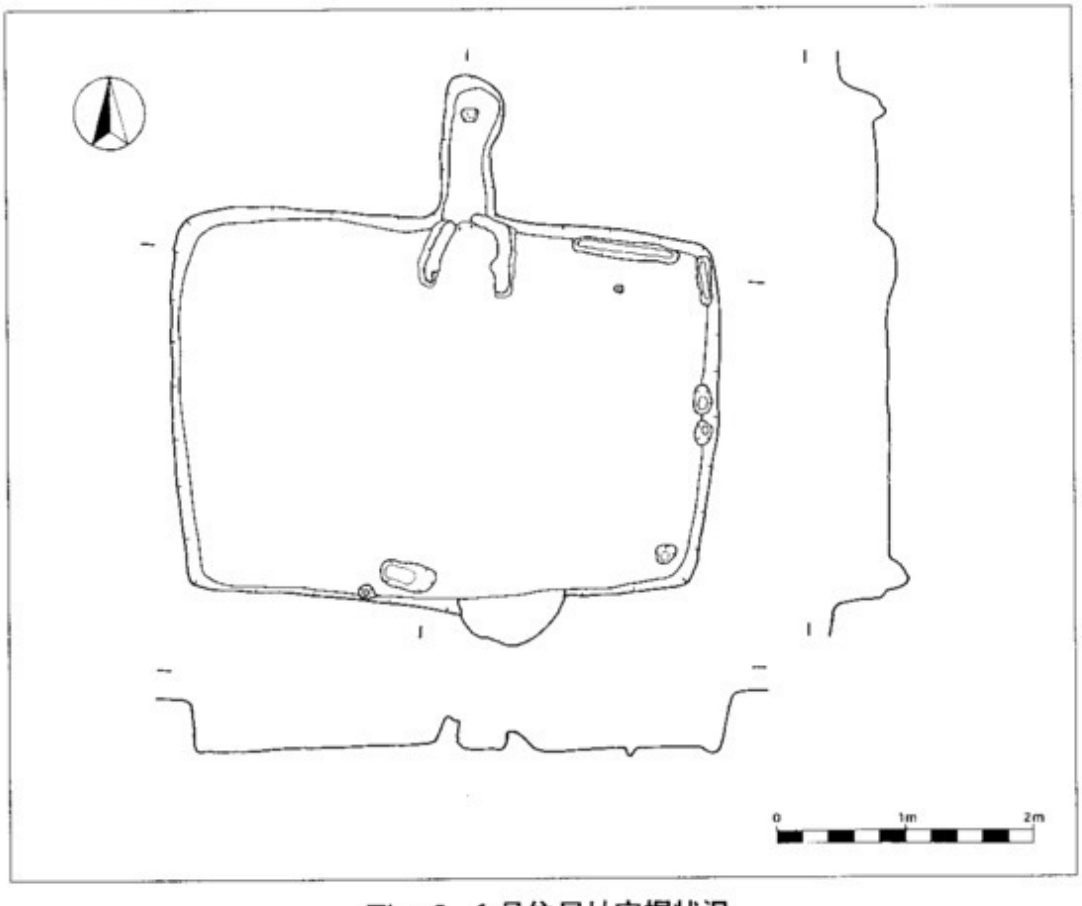


Fig 5　1号住居址完掘状況

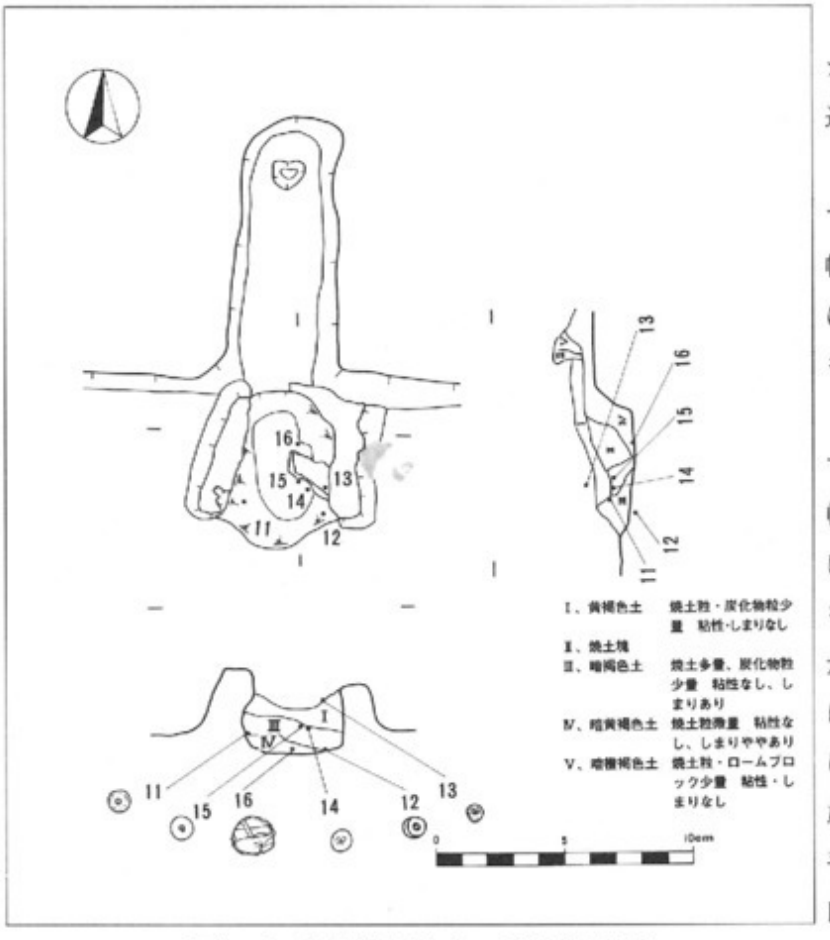


Fig 6　1号住居址カマド完掘状況

１１から１６は、カマド内からの出土遺物である(Fig8)。

１１は、石製臼玉である。長さは0.6㎝、幅0.8㎝である。色調は暗赤褐色(2.5YR3/1)を呈する。

１２は、土製管玉である。長さは1.5㎝、幅0.9㎝である。色調は暗赤褐色(2.5YR3/1)を呈する。雲母を微量に混入する。焼成は良好である。側面には縦位のミガキが施される。端面は、平滑化されておらず、凹凸がある。

１３は、玉状土製品である。長さは2.0㎝、幅0.7㎝である。色調はにぶい赤褐色(5YR5/4)を呈する。胎土中には混入鉱物は認められない。焼成は普通である。下方の端面を欠損する。表面にミガキがみられないため、玉と断定はできない。

１４は、土製小玉である。長さは0.8㎝、幅0.9㎝である。色調は明黄褐色(10YR7/6)を呈する。胎土中には混入鉱物は認められない。焼成は普通である。

１５は、土製管玉である。長さは1.2㎝、幅0.9㎝である。色調はにぶい黄褐色(10YR7/4)を呈する。胎土中には混入鉱物は認められない。焼成は普通である。側面はよく磨かれるも、両端は、不均一な凹凸がある。

１６は、用途不明の土製品である。長さは1.5㎝、幅1.7㎝である。色調は暗赤褐色(10YR3/1)を呈する。石英・雲母を微量に混入する。焼成は不良である。赤色変成している箇所が有り被熱したことが窺える。両面に幾条もの削痕がみられる。

この他にも、トレンチャーや覆土上層出土の一括遺物がある。以下にその概要を記す(Fig9)。

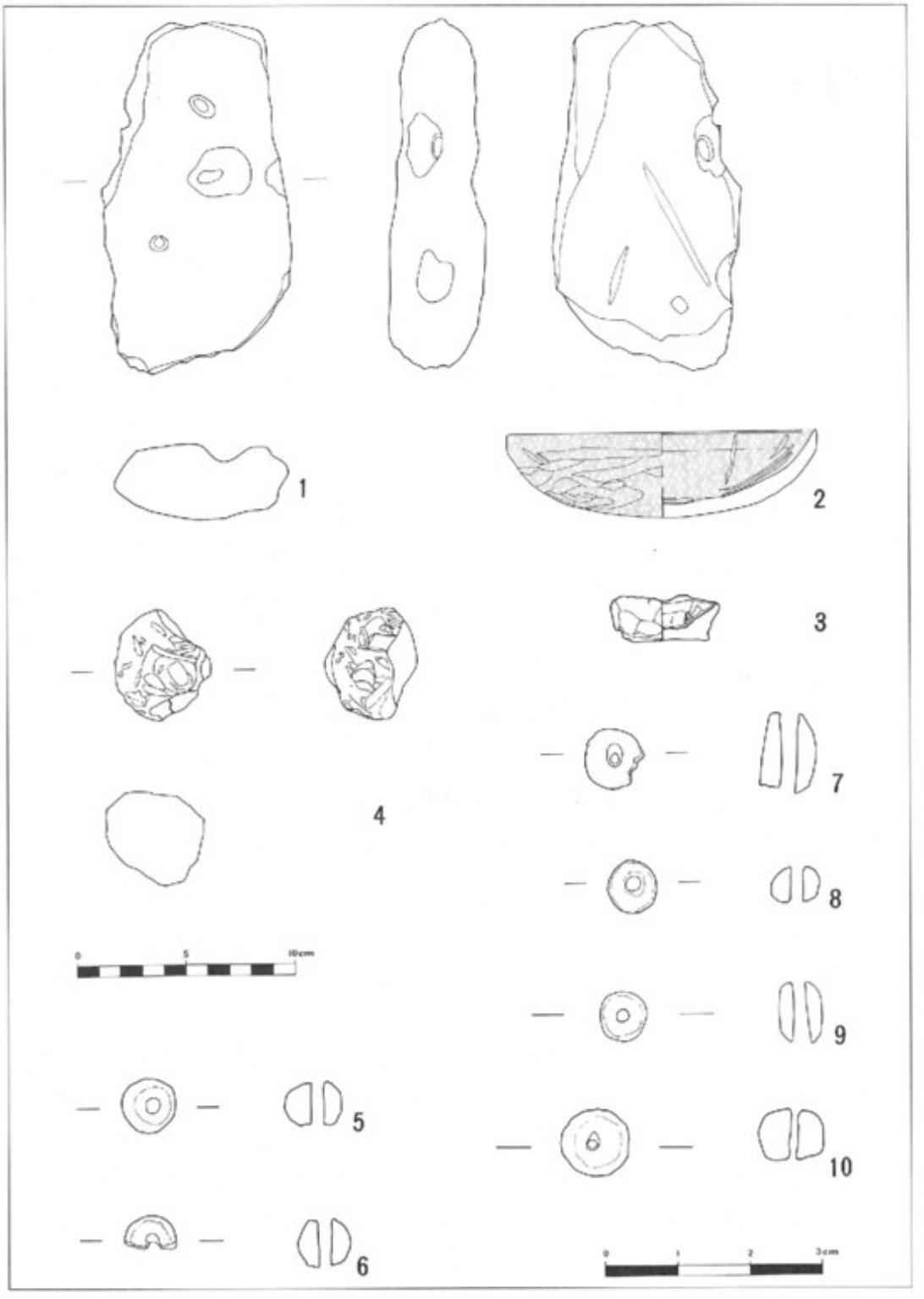


Fig 7　1号住居址出土遺物

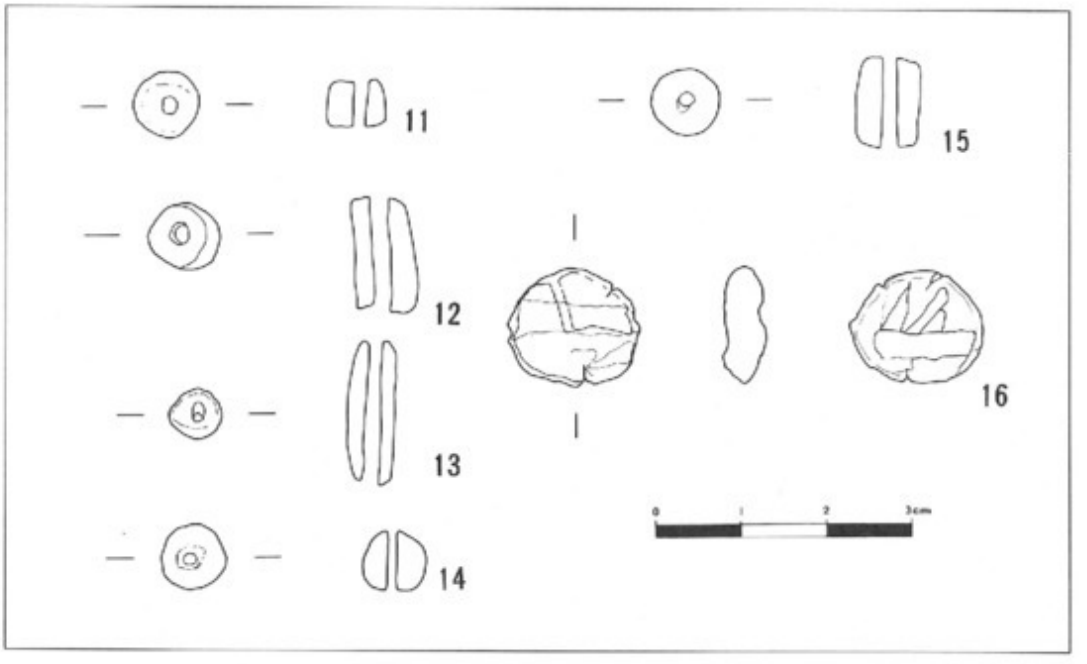


Fig 8　1号住居址カマド出土遺物

１７は、土製勾玉である。長さは2.0㎝、幅0.7㎝である。色調は灰褐色(7.5YR4/2)を呈する。長石を微量に混入する。焼成は普通である。

１８は、土製小玉である。長さは0.7㎝、幅0.7㎝である。重量は0.6ｇである。色調は灰褐色(5YR5/2)を呈する。胎土中には混入鉱物は認められない。焼成は良好である。

１９は、土製勾玉である。長さは2.1㎝、幅0.7㎝である。色調はにぶい黄橙色(10YR6/4)を呈する。長石を少量混じえる。焼成は普通である。１７に比べ、やや中央よりに穿孔される。

２０は、不明石製品である。材質は軽石である。遺存長は最大で、長さ9.0㎝、幅6.4㎝を計る。磨られた使用面上に削痕が残ることから、研磨する用途に用いられたものと思われる。

１号住居の存続期間については、住居床面のほぼ直上で出土した遺物２の土師器杯の形態より６世紀後半から７世紀前半の年代を比定することができる。遺物２の土師器杯は、両面とも黒色処理が施され、内面の見込み部分には放射線状のヘラミガキがみられる。形状の点では、須恵器杯蓋を模倣した可能性を指摘することができる。この二つの点は、６世紀後半から７世紀前半にかけての北関東出土土師器の特徴である(長谷川 1993、樫村 1993)。また、１号住居から出土した炭化物の量からはこの住居が廃絶時に火を受けた焼失住居である可能性[1)]が指摘できる。

註1)前者からはＴＫ43～ＴＫ209型式並行段階、後者からはⅣ期(6世紀後半)またはⅤ期(7世紀前半)に対応するものと考えられるが、他の共伴遺物が少ないために年代幅を広く設けた。

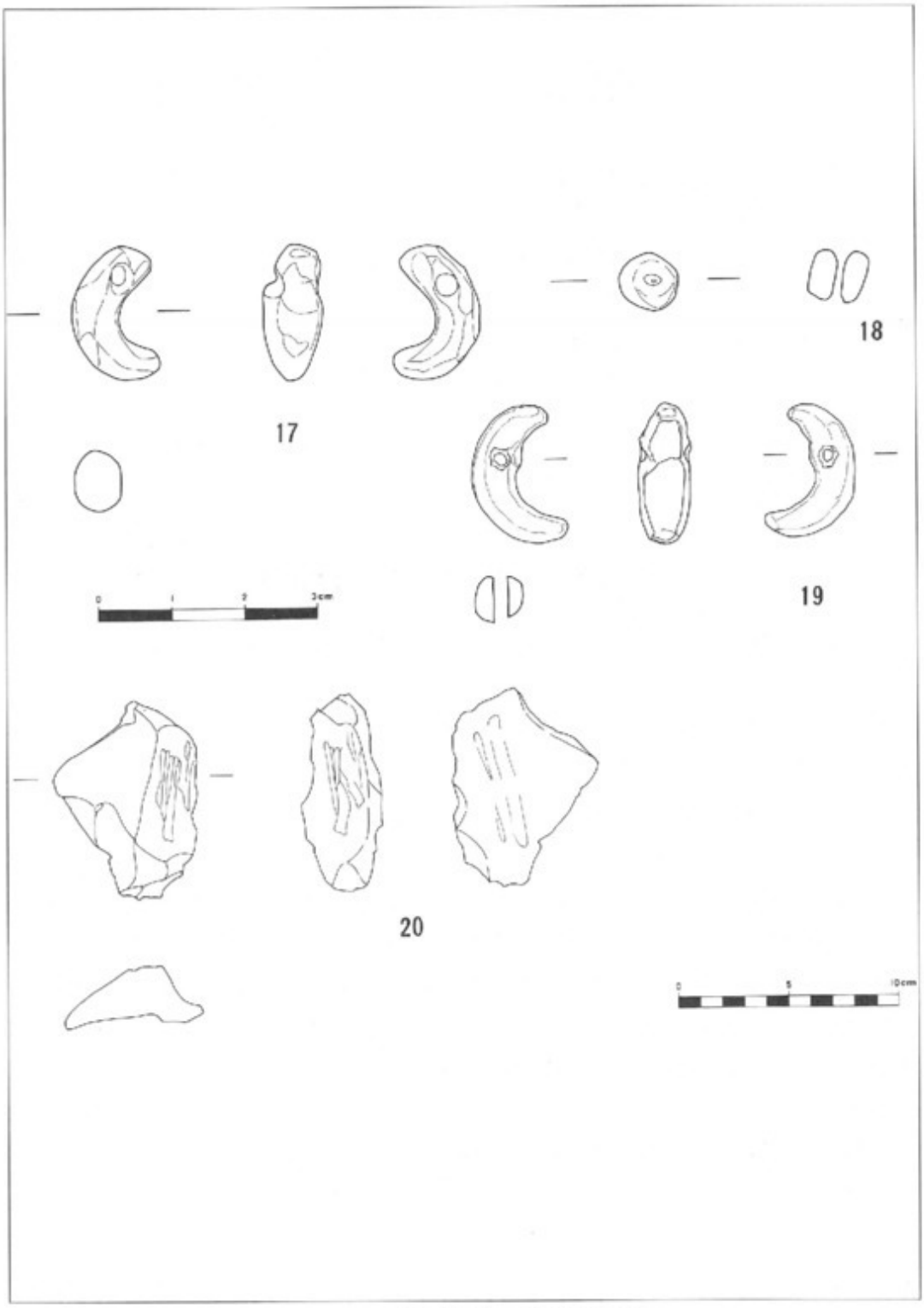


Fig 9　1号住居址一括出土遺物

第二節　２号住居址

２号住居址は１号住居址の南側に切れあう住居址である。明確な範囲や付属施設は把握できなかったが、確認面上に焼土粒や硬化面がみられ、南側に貯蔵穴と考えうる土坑が検出されたために、掘り込みの消失した竪穴住居址と認識した(Fig3、10)。

出土遺物には、貯蔵穴中より土師器高杯が１点発見された(Fig11)。２１は、土師器高杯の杯部である。色調は、外面が橙色(7.5YR6/8)、内面が橙色(7.5YR7/4)である。胎土中には、石英・長石粒を微量に含み、焼成は良好である。外面にはヘラミガキが施されるほか、一部に赤色顔料の痕跡を残している。

明確な出土遺物がみられないため、２号住居の正確な帰属時期は不明である。ただし、掘削時に出土した確認面上の出土遺物に古墳前期の土師器が見られ、貯蔵穴中出土の高杯も古墳時代前期の可能性があるため、古墳時代前期の可能性が高いものと判断される。

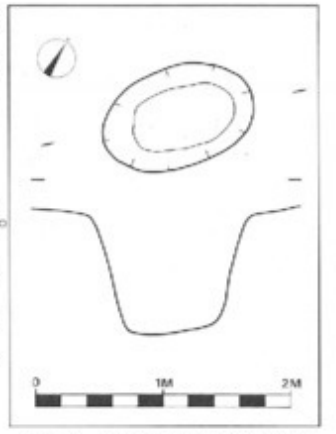


Fig 10　２号住居址貯蔵穴完掘状況

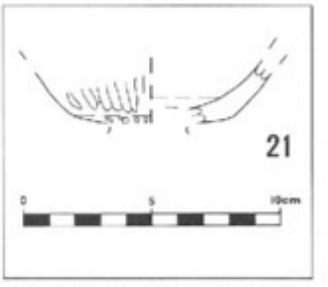


Fig 11　２号住居址貯蔵穴内出土遺物

第三節　一括出土遺物・寄贈資料

当節では、調査時の一括遺物と、調査中に寄贈を受けた資料を取り上げる(Fig12·13)。

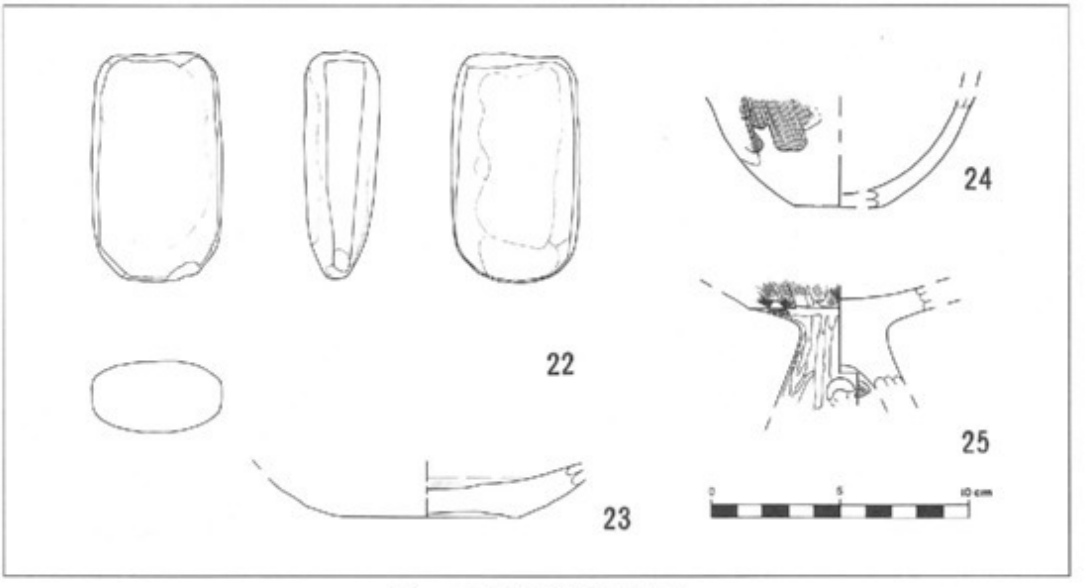


Fig 12 遺構外出土遺物

２２は、磨製石斧である。遺存長は最大で、長さ8.9cm、幅5.0cm、厚さ2.8cmを計る。全体がよく磨かれている。

２３は、土師器壺・甕類の底部である。本調査時の調査区確認面上の一括遺物である。復原底径は、3.4cmを計る。色調は、内面が明黄褐色(10YR7/6)、外面が橙色(7.5YR6/8)を呈する。胎土は長石粒を微量に含み、焼成は良好である。外面にハケメを残す。

２４は、土師器壺・甕類の底部である。試掘調査時の出土である。底径7.0cmを計る。色調は橙色(5YR6/8)である。胎土中には長石を少量含み、石英も微量に混じえる。焼成は普通である。

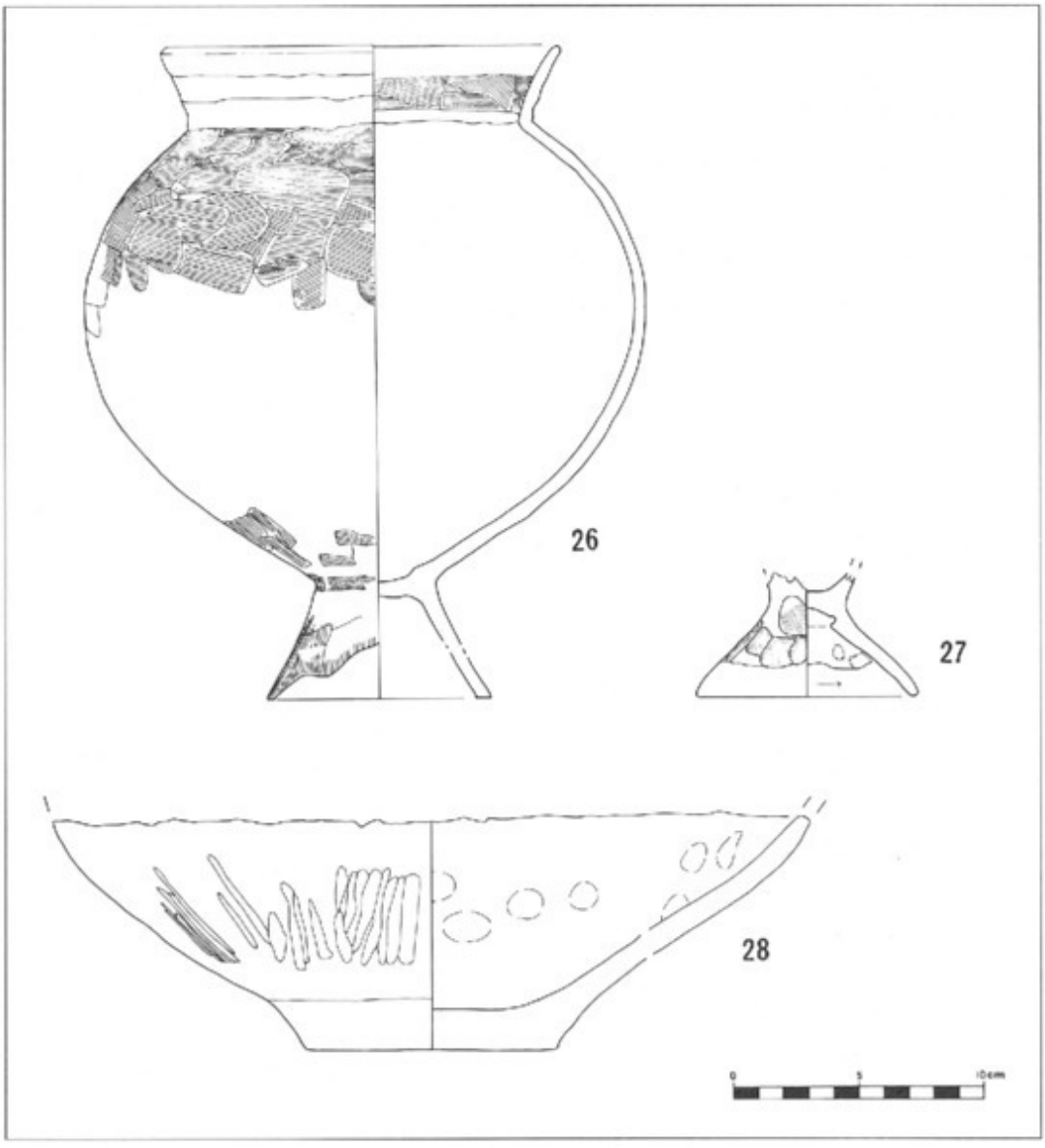


Fig 13 寄贈資料

底部内面に煤が付着している。

２５は、土師器高杯の杯底部から脚部上半である。試掘調査時の出土である。色調は、明黄褐色(10YR6/8)を呈する。胎土中には、長石を少量含む。焼成は普通である。杯底部外面と脚部内面はハケメを、軸部外面は、粗いヘラミガキを各々施している。軸部には、現存部だけで2箇所穿孔されている。

２６から２８は、本調査中に遺跡地周辺で出土したものとして、中村西根在住の宮本喜男氏より寄贈をうけた資料である。同氏の話を伺うかぎりでは、中新台遺跡ではなく同一台地南側の堂場台遺跡より出土したものと判断される。

２６は、土師器台付き甕である。脚台部が一部欠損する他は完形である。口径14.6cm、器高25.9cm、裾部の復原径が7.8cmを計る。色調はにぶい橙色(7.5YR7/4)である。胎土は長石を微量に含む。焼成は良好である。体部上半外面及び口縁部内面は横位の、体部下半から脚台部外面は縦位のハケメが施される。口縁部は外面に粘土紐の接合痕を明瞭に残す。外面には一部に煤が付着する。なお、口縁部外面に粘土紐輪積み痕を有する台付甕は、印旛手賀沼周辺から東京湾岸にかけて多く出土する傾向をもっている(三木 1991、玉井 1995)。

２７は、土師器台付き甕の脚台部である。底径は8.1cmを計り、色調はにぶい黄橙色(10YR7/4)を呈する。焼成は普通である。

２８は、土師器壺・甕類の底部である。底径は9.6cmである。色調は橙色(5YR6/6)を呈する。焼成は良好である。体部外面は縦位のヘラミガキ、内面は指頭圧痕を残す。

第四章　まとめ

今回の中新台遺跡の調査成果としては、古墳時代後期の住居址を1軒(１号住居址)検出することができたことが挙げられる。その年代は、床面直上の土師器杯より6世紀後半より7世紀前半頃と推定される。出土遺物には土師器、土製玉類(臼玉・勾玉など)、石製品などがみられる。特に土製玉類は、カマド内部にやや多く出土がみられた。

２号住居址は、掘り込みを消失したために明確なプランを確認することができなかった。貯蔵穴中などから古墳時代前期と思しき高杯の杯部が出土していることから、住居の存続期間も概ね同時期に当たるものと考えられる。

今回の調査区は中新台遺跡全体の中では最も外縁の部分にあたっている。遺物の分布からは台地の中央部分にかけて遺構の密度がより高くなるものと思われる。また、道路を隔てた同一台地南側の堂場台遺跡も、中新台遺跡と一連の遺跡群である可能性がある。

土浦市内において古墳時代後期という時期は、それ以前より集落跡の数が増加する時期といわ

れている。この原因は、湧泉をもつ谷津田主体の水田経営から沖積低地にまで開発の対象が増加するためと考えられている(塩谷 1991)。今回調査された中新台遺跡も、花室川低地に直に接する台地上に立地しており、この傾向を裏付けている。この他の花室川流域に位置する古墳時代後期の調査事例には、烏山遺跡(土浦市教育委員会 1988)や念代遺跡(茨城県教育財団 1990)が挙げられる。

今後の課題としては、これら周辺域の事例を含めて、花室川という単一河川流域に営まれた古墳時代集落の量的・質的な相違を、立地条件や時期的な変遷の中で具体的に明らかにしてゆくことが挙げられるだろう。

引用参考文献（敬称略、５０音順）

樫村宣行　1993「茨城県南部における鬼高式土器について」『研究ノート 2号』所収　発行 財団法人茨城県教育財団

財団法人茨城県教育財団　1990『茨城県教育財団調査報告第60集 永国地区住宅団地建設予定地内埋蔵文化財調査報告書 寺家ノ後Ａ遺跡 寺家ノ後Ｂ遺跡 十三塚Ａ遺跡 十三塚Ｂ遺跡 永国十三塚遺跡 鎌倉街道』

財団法人茨城県教育財団　1991『茨城県教育財団調査報告第64集 一般国道125号道路改良工事地内発掘調査報告書 西郷遺跡 南丘遺跡 長峰遺跡 数光遺跡 宮塚遺跡 右郷館跡 内路地台遺跡』

塩谷　修　1991「第３章　原始・古代の遺跡」『図説　土浦の歴史』所収

玉井輝男　1995「第四章 第一節 遺構と遺物」PP31、「終章」PP38『寺ヶ崎南遺跡発掘調査報告書』　猿島町教育委員会 編

土浦市教育委員会　1988『烏山遺跡』

長谷川厚　1993「7 関東」　『古墳時代の研究 6 土師器と須恵器』所収

三木ますみ　1991「第三章 第四節 鎌田遺跡」『筑波大学先史学・考古学研究調査報告５ 古墳測量調査報告書Ⅰ』　筑波大学歴史人類学系 編

写真1　発掘調査前風景

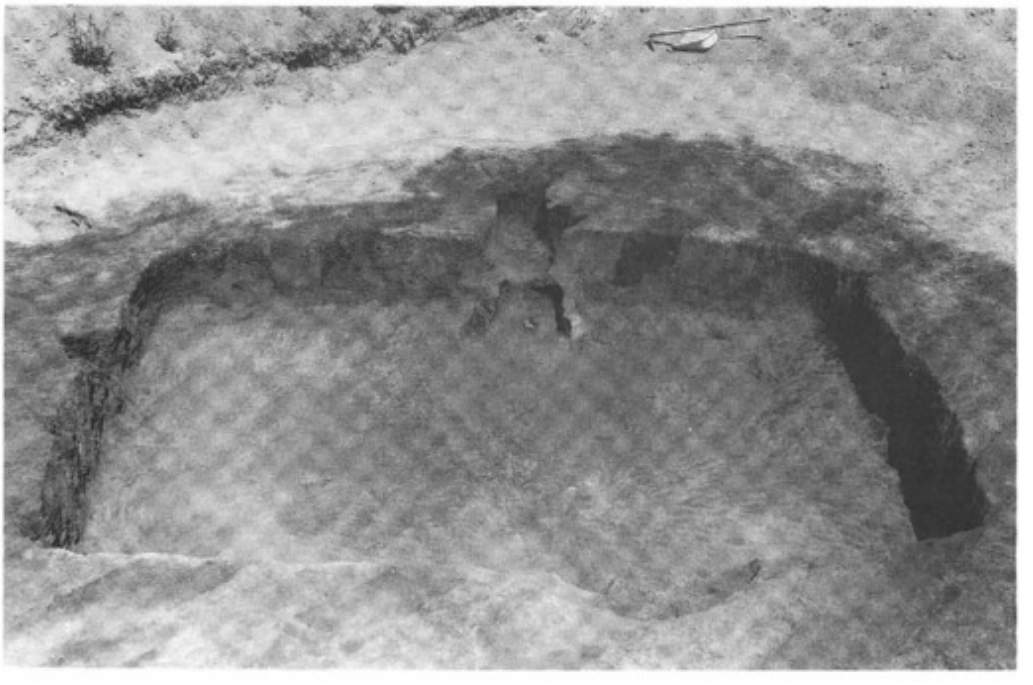


写真2　1号住居址完掘状況（南より）

PLATE 2

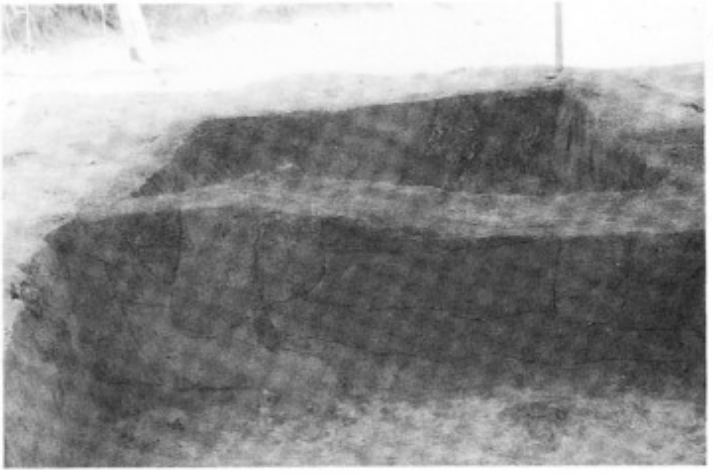


写真３　１号住居址覆土
堆積状況（東西セクション西側）

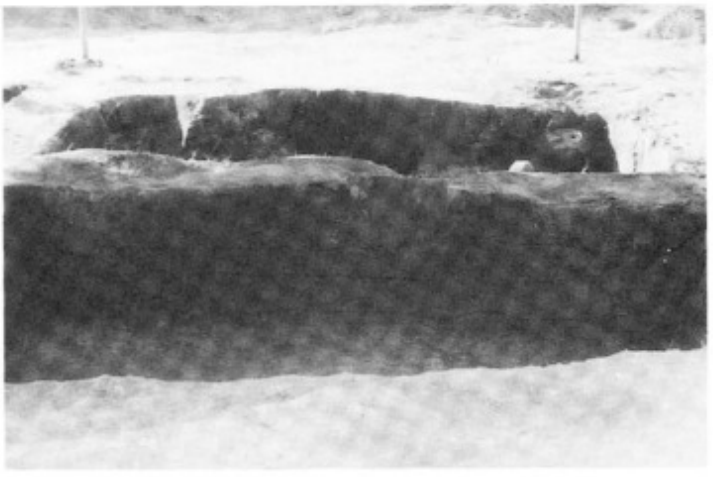


写真４　１号住居址覆土
堆積状況（東西セクション東側）

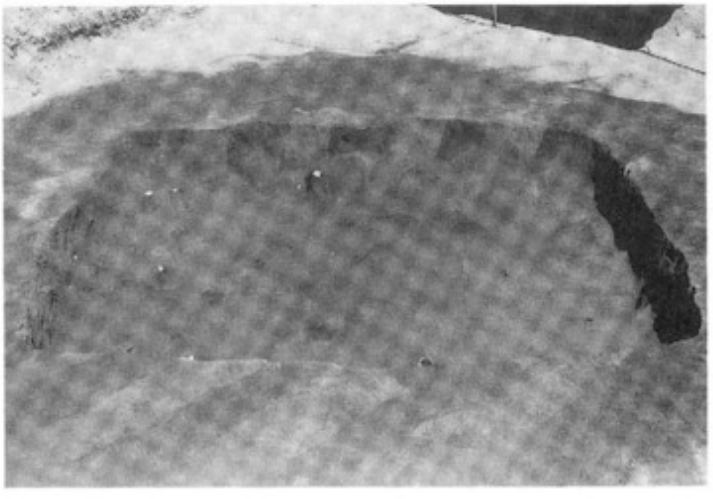


写真５　１号住居址遺物
出土状況（南より）

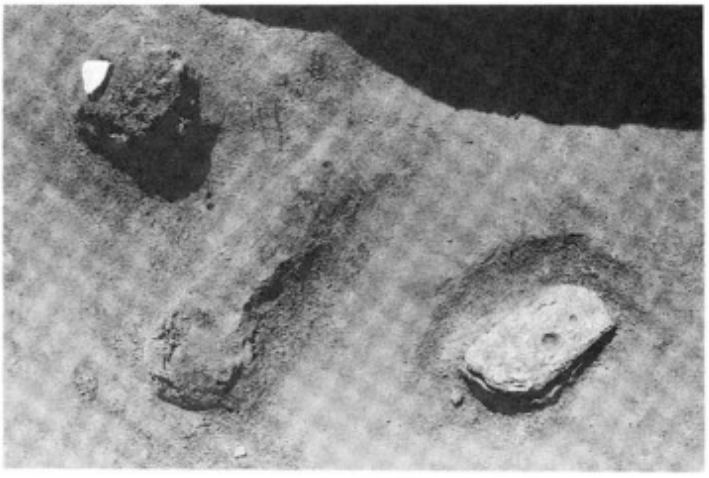


写真6　1号住居址遺物
出土状況

写真7　1号住居址カマド
完掘状況(南より)

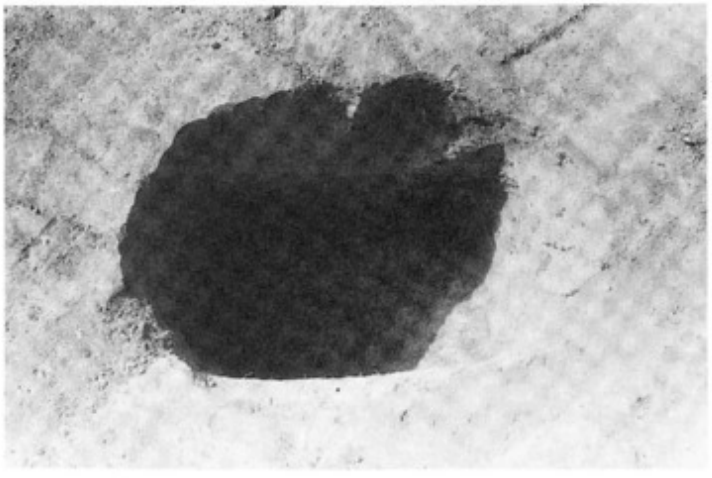


写真8　2号住居址貯蔵穴
完掘状況(南より)

PLATE 4

1号住居址出土遺物（1～10、番号は図に対応）

11

12

13

14

15

16

1号住居址カマド内出土遺物（11～16）

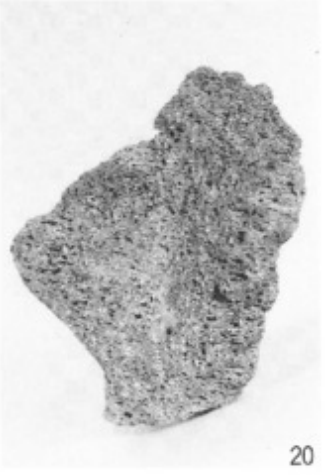
17

18

19

1号住居址一括出土遺物（17～19）

PLATE 6


20

21

22

1号住居址一括出土遺物(20)　2号住居址一括出土遺物(21)

23

25

一括出土遺物（22～25）

24

26

28

寄贈資料（26、28）

報告書抄録

ふりがな	つちうらしなかむらにしねちないなかしんだいいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書名	土浦市中村西根地内中新台遺跡発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	橋場君男
編著機関	土浦市教育委員会・土浦市遺跡調査会
所在地	〒300　都道府県　茨城県土浦市下高津二丁目7-36　TEL 0298 (26) 3484
発行年月日	西暦　1996　年　3　月　29　日

ふりがな 所在地	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
中新台遺跡	茨城県土浦市 中村西根 935番地	A－41	5228	36°3′10″	140°9′58″	平成6年 8月5日 ～ 平成6年 8月18日	約115㎡	運動場造成工事に伴う発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
中新台遺跡	集落跡	古墳時代 前期	竪穴住居址　1軒	土師器	
		古墳時代 後期	竪穴住居址　1軒	土師器・土製玉類 石製玉類ほか	

土浦市中村西根地内　中新台遺跡
発掘調査報告書

発行日　1996年3月29日
発　行　土浦市教育委員会
編　集　土浦市遺跡調査会
印　刷　（株）石崎印刷土浦店